

令和5年度 共通教育アンケート（1年次生対象）実施報告書

大学教育センター
全学共通教育部門長 今井 航

1. アンケートに対する学生の取り組みと周知方法について

本学の共通教育は、初年次教育、共通基礎、教養教育、キャリア教育の4科目で成り立っている。

初年次教育科目には、教養講座を含む「教養ゼミ」を置いている。

共通基礎科目は、日本語表現、情報リテラシー、英語、初修外国語を含み、日本語表現には「日本語表現法」を、情報リテラシーには「情報処理基礎」を、英語には、その基礎に「英語」のⅠ～Ⅳを、その応用に「専門英語」「アカデミック・スキル」を、さらに、その検定に「TOEIC」「TOEFL/IELTS」を置き、初修外国語には、その基礎に「ドイツ語」「フランス語」「中国語」「韓国語」を置き、その応用に「中級中国語」「上級中国語」「ビジネス中国語」を置いている。

教養教育科目は、A～Fの6群を有し、各群は順に、自然と科学、社会構造と生活、歴史と文化、思索と創造、芸術と健康スポーツ、地域学と称している。群ごとに、その名称に見合う科目を置いている。

キャリア教育科目には、「キャリアデザイン」のⅠ～Ⅳや「キャリアデザイン実践演習」「BINGO OPEN インターンシップ」を置いている。

このように本学の共通教育は、体系的に整備されている。学生の興味・関心に沿うと同時に、系統的かつ多様な学びの機会を提供しようとしている。学部・学科の専門教育との連絡の観点で言えば、本学のカリキュラムの土台になっている。

この共通教育アンケートを毎年、1年次生を対象に実施し、その結果を通じて「土台」の点検・改良・改善を続けていきたい。

そこで、共通教育を中心とした学修についての、自由記述を含む41項目の設問からなる令和5年度の学生対象の共通教育アンケートを、令和6年1月9日(火)～2月20日(火)で、実施した。回答率は70.0%と、昨年度の48.5%に比べて、かなり上昇した。1年次生総数の776人中、回答したのは543人である。

学部としての回答率を示すと、薬学部91.4%（昨年度は59.2%）に次いで、生命工学部88.1%（昨年度は67.5%）、人間文化学部64.2%（昨年度は53.3%）、経済学部60.6%（昨年度は31.2%）、工学部54.5%（昨年度は45.2%）の順であった。その率は、どの学部においても上昇した。

担任等を通じて、学生に回答を促すのに協力された学科長はじめ各学科に、まずは感謝したい。その上で引き続き、同アンケートの開始時の周知方法を工夫したり、途中経過の報告回数を増やしたりする等して、各学科長の協力を得て、更なる回答率の上昇を目指したい。

2. 所属学部・学科のカリキュラム理解度および大学教育センターの学修支援体制理解度

所属する学部・学科のカリキュラム・マップについて、13.8%の学生（昨年度は14.8%。以下括弧内の数値は比較対照のために挙げる昨年度調査の結果）は「よく理解している」、50.6%（52.5%）は「だいたい理解している」と回答しており、6割半は理解している。

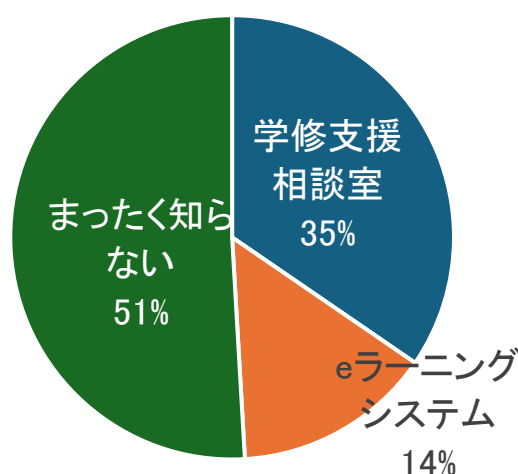
一方、「少しだけ理解している」と回答したのは28.4%（25.7%）である。「まったく知らない」と回答したのは全学で2.4%、「まったく理解できていない」が2.6%、「聞いた（見た）ことがある」程度の者は2.2%と、1割弱の1年次生は所属する学部・学科のカリキュラム・マップについての理解が乏しいと言わなければならない。

今年度の回答を学部別に見ると、経済学部の回答者のうち3.6%、人間文化学部の回答者

のうち 2.0%、工学部の回答者のうち 1.4%、生命工学部の回答者のうち 1.5%、薬学部
の回答者のうち 3.1%が「まったく知らない」と答えている。また、「聞いた（見た）ことがある」
程度の者となると、経済学部 2.2%、生命工学部 0.7%、薬学部 5.2%となっている。

年々それへの理解度が高まっていると見られるが、一方で自学部のカリキュラム・マップ
について理解の乏しい学生がかなりの比率を占めると、進級や卒業に履修が必須の科目の
単位の取りこぼしなどにもつながる。引き続き、カリキュラムの編成について、より適切な
説明が学生に対して行われることが望まれる。

設問2 大学教育センターの学修支援について知って いるものを選んでください。



次に、大学教育センターが行っている各種の学修支援に関して、「まったく知らない」と
回答した学生が回答者全体の 50.9%（58.0%）にのぼった（設問 2）。昨年度よりは下降し
たものの、遡って平成 30 年度のこの比率は 35.5%であり、その後、周知方法の改善を試み
たものの、令和元年度は却って増え、令和 2 年度はコロナ禍の下で対面の指導が制約を受
けたことも影響したのか、さらに増えてしまった。いまだ半数以上は知らない、という結果
である。

学修支援相談室について知っている者については、昨年度の 33.3%から今年度の 34.6%
へと微増した。また e ラーニング・システムについて知っている者は、14.5%（8.6%）へ
と上昇した。

数学については、個別指導が行えるように、大学教育センターの特命講師が工学部生には
とくに焦点を絞って指導を行う措置を講じ、今年度も、特別のオンライン教材も利用するな
ど、並々ならぬ努力が重ねられ、その利用は増加傾向にある。

学修支援相談室を知っていると回答した 207 名に限り、その利用度を尋ねたところ、「ま
ったく利用したことがない」が 93.5%にものぼり、「よく利用している」0.9%、「まあまあ
利用している」2.9%、「たまに利用している」2.6%に留まっている。

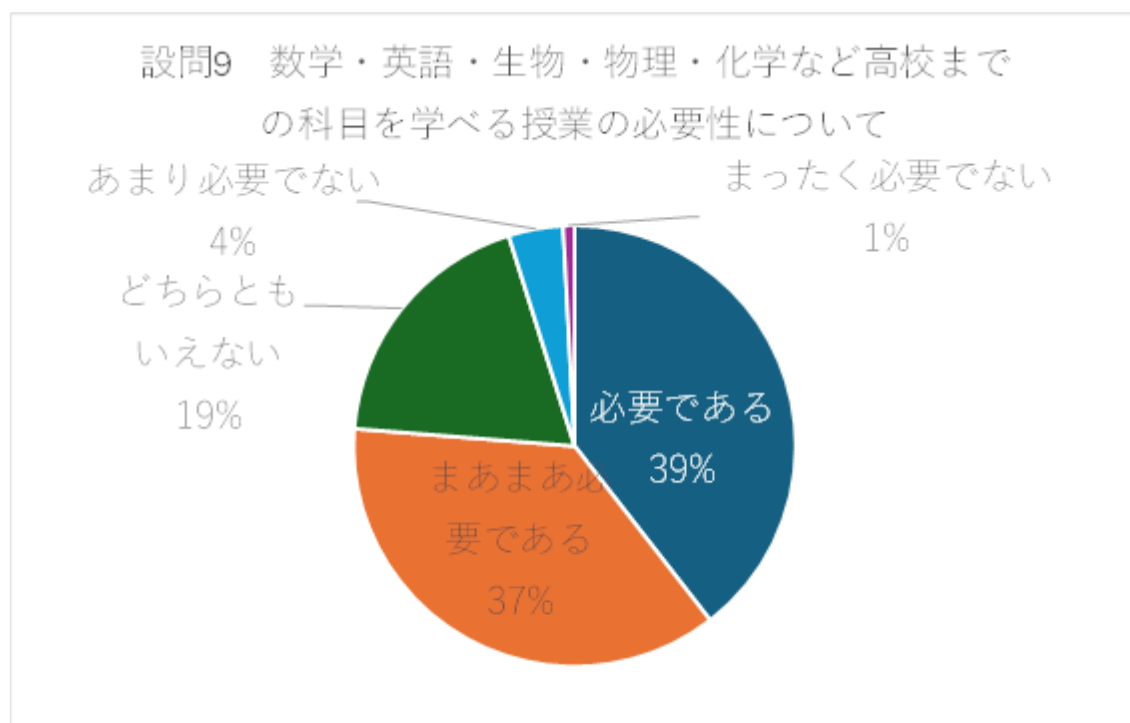
学修支援相談室を「まったく利用したことがない」と答えた学生が挙げた利用しない理由
は、「利用する必要性がない」37.9%（35.4%）、「場所が分からない」28.6%（30.3%）、「時
間が合わない」10.8%（12.0%）、「個別相談に不安（抵抗）がある」8.5%（7.8%）、「職員
室のように入りづらい」7.4%（7.1%）、「他人に知られたくない（周囲の目が気になる）」

4.1% (4.5%) である。自由記述欄に「元々知らなかった」「そもそも知らなかった」「どのようなものなのかいまいちわからない」とあるように、利用者を増やすためには、例えば入学間もない時期によく知らせることが必要であると思われる。その一方で、e ラーニングシステムに関して、自由記述欄には「TOEIC 対策のため数回利用したことがあるが、レベルに合わせた問題があるため取り組みやすい」「ネットでできるのは楽でいい」などのコメントが書き込まれていた。

前回の調査から、利用したことがある人へ良かった点を尋ねるようにしている。そこでは「話を丁寧に聞いてくれたり、アドバイスを的確に言ってくれました」「自分が疑問に思っている点や不安な箇所を丁寧に教えてくださるため、授業に対する理解度を深めることができました」「マンツーマンで分かりやすく教えて頂けた」などの記述が見られた。

こうした成果も確認できることから、今後も、種々の学修支援の提供実態について、新入生のオリエンテーションをはじめとする可能な機会を捉えて周知していくとともに、気軽に訪れることができる雰囲気づくりに努めていきたい。

さらには、本当に学修支援を必要とする学生に的確な指導が提供されるためにも、大学教育センターだけでなく、全学を挙げて学修支援体制の認知度の向上に努めていきたい。



高校までの科目を復習する授業すなわちリメディアル教育の必要性については、「必要である」が 39.5% (41.0%)、「まあまあ必要である」と回答した学生の割合は 36.8% (37.3%) で、昨年度に比べてあまり変わらない（設問 9）。8 割近くの学生がリメディアル教育に対する必要性を感じており、学修支援相談室が役立ちうる余地は十分にある。

高校までの科目を復習する授業の必要性に関連して、「必要である」「まあまあ必要である」と答えた 76.3% の学生に、どの科目のリメディアル教育が必要かを尋ねたところ、英語が 22.6% (22.5%) とトップである。次いで、数学 17.3% (15.7%)、生物 11.9% (13.1%)、化学 11.7% (11.7%) など理数系の科目が続いているが、国語も 11.3% (10.9%) が必要と回答している。

学生が最も復習を必要とされている英語について、薬学部生は 11.9% (11.1%) が「必要」と答えているが、その他の学部は昨年度と同様に、いずれも 20% 以上で、比較的

復習の必要性を感じている。

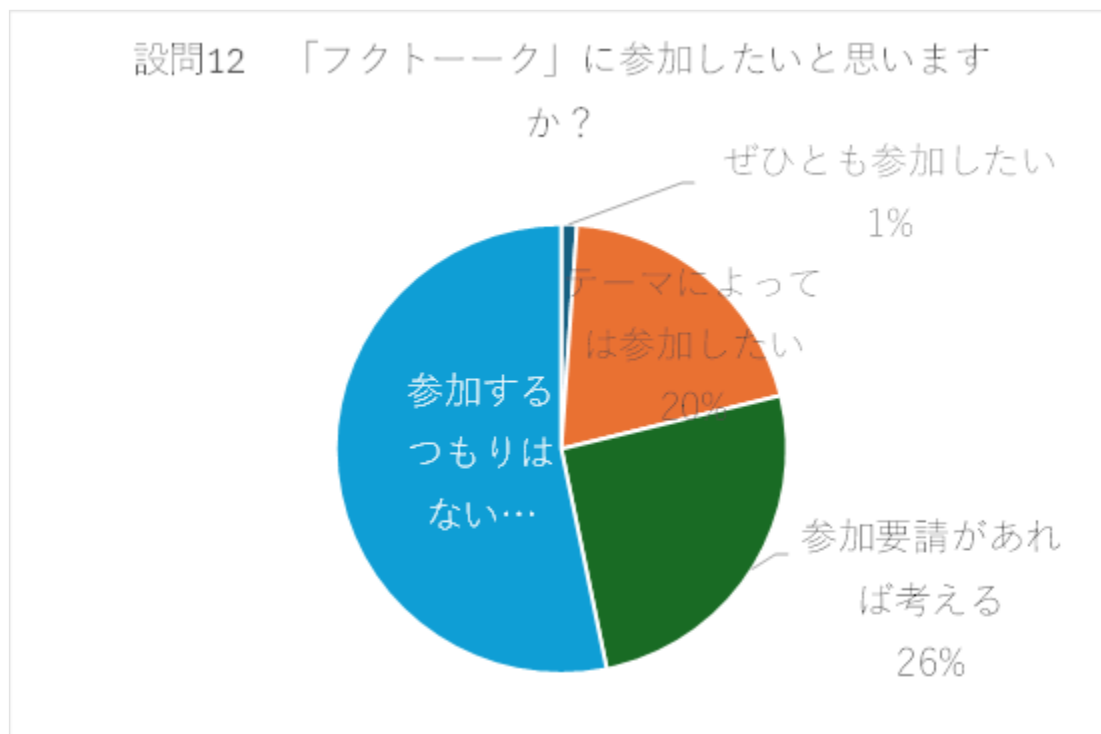
入学直後に行う英語プレイスメント・テストにおいても、英語力に弱点のある学生が多く見出されている。担当教員は、中学、高校での学習を繰り返すのではなく、大学生として楽しめる、また発見のあるように教材及び指導法に配慮しており、教え方を対話的にして興味をもたせるよう腐心し、再履修クラスも設定して復習的な指導を実践しているが、なおいっそうの工夫を凝らすことが求められる。

3. フクトークについて

大学教育センターでは、共通教育を中心として大学での学びに関する学生の生の声を聞き、教育改善に活かしていくための「フクトーク」と称する催しを毎年ほぼ年末に実施している。

令和5年度は11月22日（水）16:30～17:50に大学会館3階 CLAFT で「温故知新～人の生き様をタテヨコへと眺めて、次代を創る～」をテーマとして実施し、参加した学生8名がグループに分かれて教養教育科目C群「歴史と文化」に関する討議を繰り広げた。

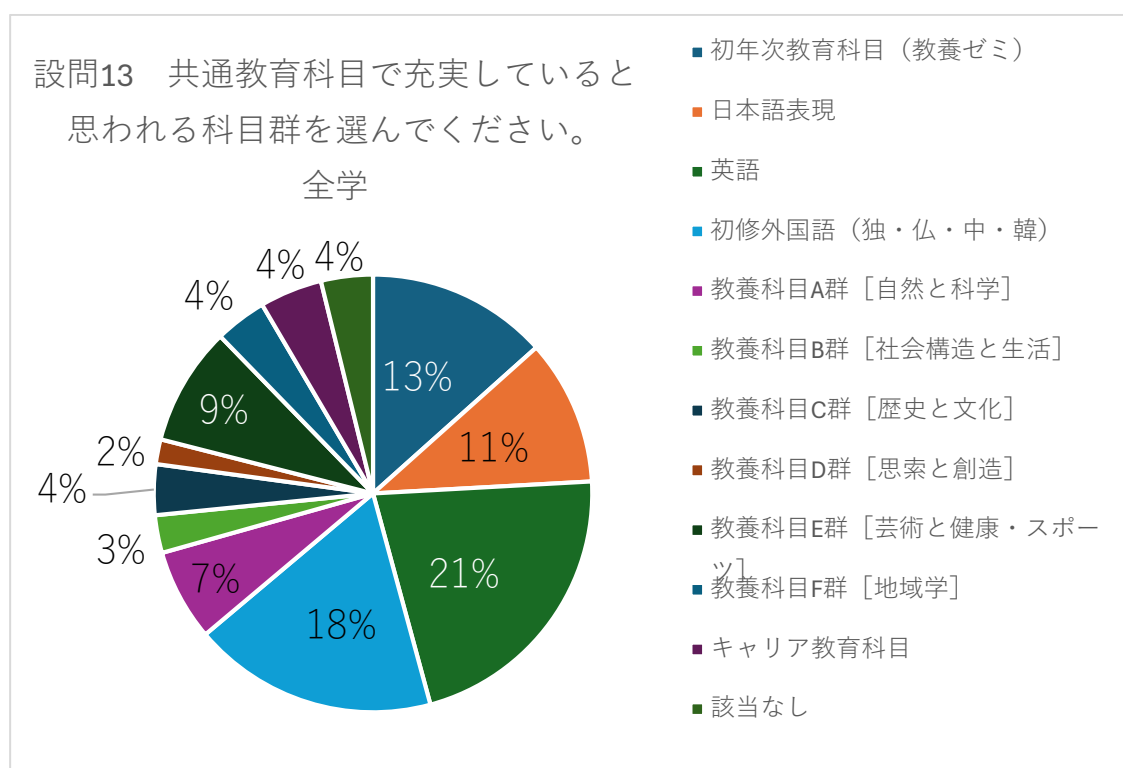
「共通教育科目などについて教員と学生が考える企画「フクトーク」について知っていますか」との設問に対して、全体の21.2%（32.7%）が「知っている」と回答し、他の78.8%（67.3%）は知らないと答えた。続く「フクトーク」に参加したいと思いますか」に対しては、「是非とも参加したい」は1.1%（1.3%）に留まり、「テーマによっては参加したい」と答えたのは20.1%（21.0%）であり、他の者は「参加要請があれば考える」25.5%（25.2%）、「参加するつもりはない」53.2%（52.5%）と消極的である（設問12）。



毎年、自主的に参加する学生は限られており、大多数は各学科からの推薦や指名で参加する状況であるが、参加した後の感想には前向きなコメントが多く寄せられる。この「フクトーク」における学生からの提案で、韓国語やドローンを使った授業科目が誕生した。こうした成果からも、引きつづき各学科の協力も得て、さらなる充実を図りたい。

4. 共通教育全体について

「共通教育科目で充実していると思われる科目群」は何かという設問では、上位から「英語」21.7% (21.6%)、「ドイツ語・中国語・フランス語・韓国語など初修外国語」18.1% (14.8%)、「初年次教育科目（教養ゼミ）」13.4% (14.3%)、「日本語表現法」10.7% (9.6%)と続き、教養教育科目の中ではE群の「芸術と健康・スポーツ」8.8%が最も多く、A群の「自然と科学」6.8%と続き、最も少ないのはD群の「思索と創造」1.8%であった（設問13、同グラフ中の数字は回答件数を表す）。このD群、あるいはB群「社会構造と生活」2.8%やC群「歴史と文化」3.7%の充実を図る必要があると見られる。

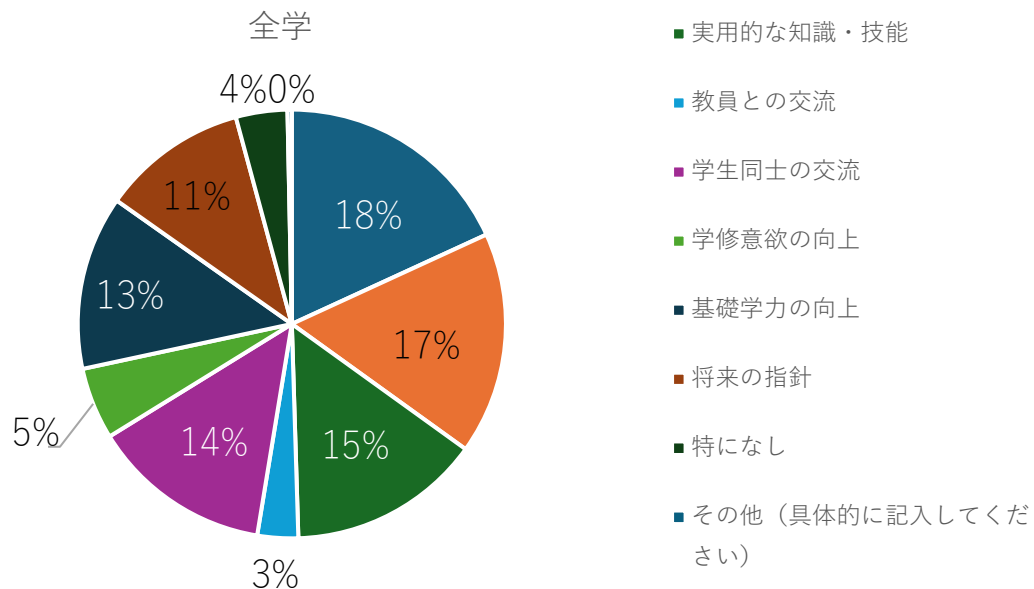


「入学当初、共通教育に期待していたこと」は何かという設問では、上位から「専門以外の幅広い知識・教養」18.2% (16.1%)、「専門での勉強の基礎」16.8% (18.9%)、「実用的な知識・技能」14.6% (14.4%)、「学生同士の交流」13.6% (14.6%)、「基礎学力の向上」13.1%、「将来の指針」11.0%等の順になっている（設問14）。「専門での勉強の基礎」が下がって代わりに「専門以外の幅広い知識・教養」や「実用的な知識・技能」が昨年度よりも順位を上げている。この点からも、教養教育科目の充実を図る必要があるだろう。

「教員との交流」は3.1% (3.5%)と、昨年度よりも下回った。教員の側から積極的に働きかけることで、いっそう本学の教員が学生に専門性や人間性において他所では得られない大きな影響を及ぼすことを期待したい。

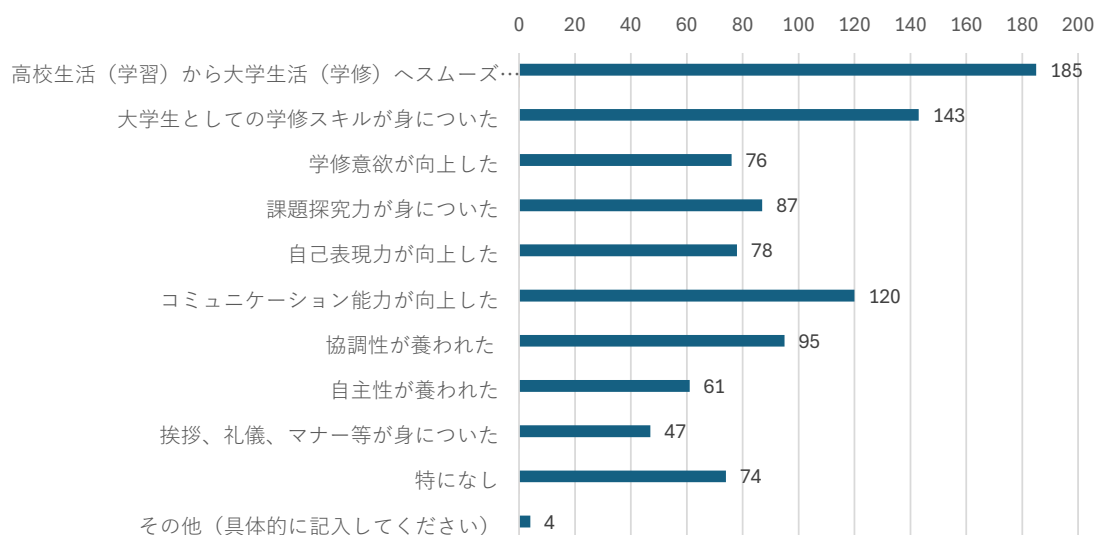
次に、これらの「期待内容に関して、どれほどの期待達成度あるいは満足度が得られたか」を%で回答することを求めたところ、満足度70%と回答した学生が最も多く、その割合は26.7%である。また、満足度100%～70%の学生の合計は、全体の64.6% (57.7%)を占めた。この数値は、令和元年度から年々、増加しており、今年度も、また増加している。

設問14 入学当初、全学共通教育に対して期待していたことを選んでください。



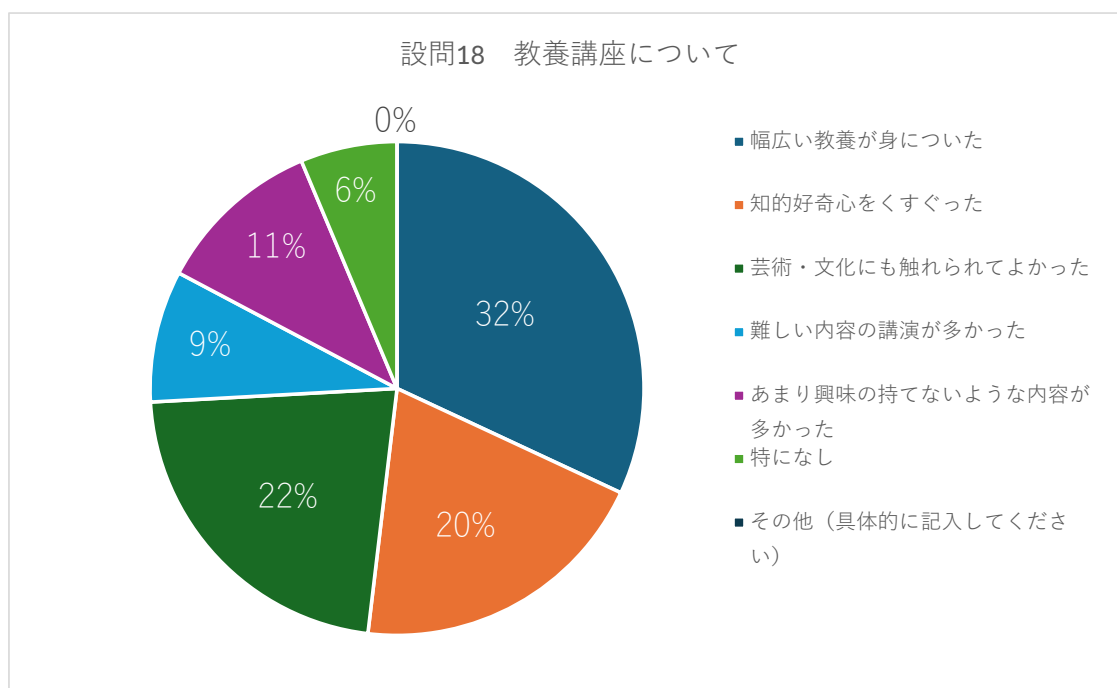
初年次教育科目として開設されている**教養ゼミ**を履修して良かった点については、上位から「高校生活（学習）から大学生活（学修）へスムーズに移行できた」19.1%（16.9%）、「大学生としての学修スキルが身についた」14.7%（13.8%）、「コミュニケーション能力が向上した」12.4%（12.4%）等の順になっている（設問 16、同グラフ中の数字は回答件数を表す）。

設問16 教養ゼミについて、良かった点を選んでください。 全学



一方、教養ゼミの改善点については、「特に改善点はない」という回答が 41.1% (45.6%) と最も高い比率であるが、これに次いで「学生の関心に対応する授業内容にして欲しい」 15.4% (12.8%)、「コミュニケーションの場がもっとほしい」 14.2% (14.1%)、「授業の進め方をもっと工夫して欲しい」が 8.9% といった順になっている。

教養ゼミの改善点として挙げられた学生の意見には、「毎回行うことが一貫しておらず、なんのための授業なのか、これを受講して何を身に付けさせたいのかが受講者としてわからない」「マイクの音が小さいのか、私語をしている人がいたのかわからないが、声が聞き取りづらかった」「分野が広すぎて難しい講義もある」といったコメントが見られた。



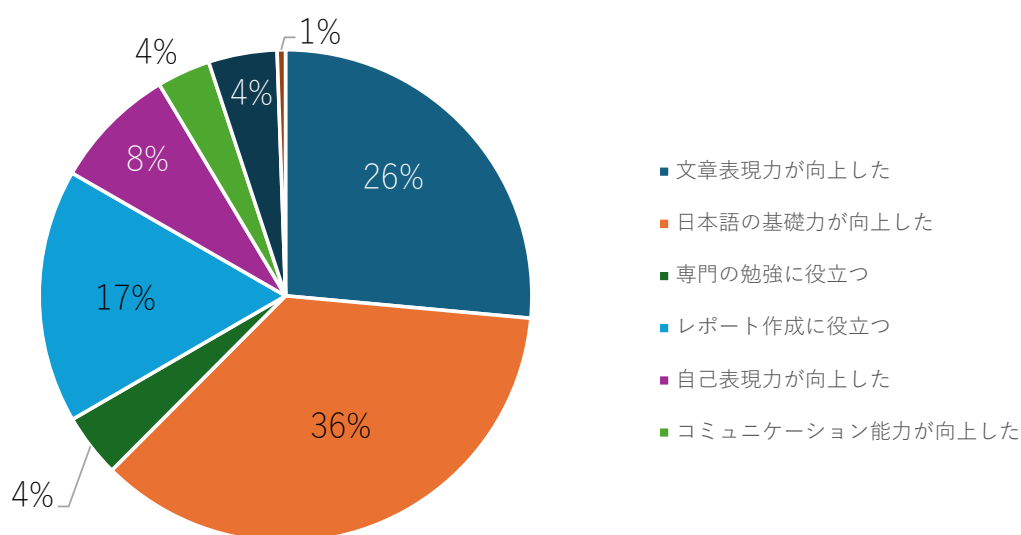
本学で開学以来続いている**教養講座**に関して、ようやく今年度は、対面で開催することができた。上位から「幅広い教養が身についた」 31.9% (31.7%)、「芸術・文化にも触れられてよかった」 22.2% (11.4%)、「知的好奇心をくすぐった」 19.9% (23.3%) 等の順になっている（設問 18）。

5. 日本語表現・語学・情報リテラシー科目について

日本語表現法については、「とても満足した」 27.3% (20.8%) と「ある程度満足した」 49.4% (49.9%) を合わせると 76.7% (70.7%) となり、概ね良好としてよい。日本語表現法の難易度に関しては、「今の程度の内容でよい」 79.2% (78.4%)、「今以上に高度な内容が必要」 7.2% (7.5%) である。一方で「今より少ない内容でよい」とする者が 9.8% (9.4%)、「まったく必要性を感じない」 者も 3.9% (4.7%) いる。

日本語表現法の授業で良かった点を尋ねたのに対して、「日本語の基礎力が向上した」 36.0% (35.0%) はシラバスで謳っている前半の目標、「文章表現力が向上した」 26.5% (26.5%) と「レポート作成に役立つ」 16.7% (14.4%) は後半の目標に相当するところである（設問 21）。こうしてみると、授業の目標は概ね達成されているようである。

設問21 日本語表現科目の良かった点を選んでください。

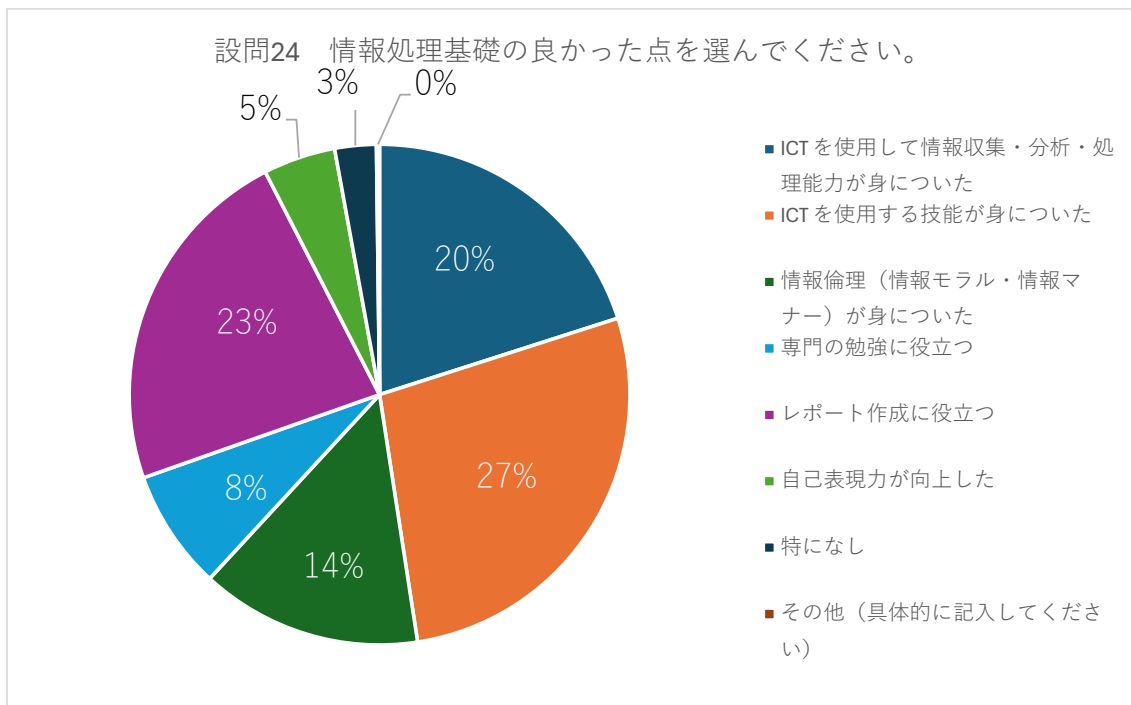


本学の**情報処理基礎**は、1年次生を対象とした科目で、高校で学んだ情報科目についての復習と大学教育で必要な最低限のスキルを学ぶ高大接続の要素をもっている。

情報処理基礎の満足度を見ると、「とても満足した」38.9%（34.5%）、「ある程度満足した」47.9%（45.5%）と、8割5分以上の学生が満足を表明している。また、回答者の73.6%（80.8%）は「今の程度の内容でよい」としている。「今以上に高度な内容が必要」とした者は15.9%であった。

何が良かったかを尋ねたところ、「ICTを使用する技能が身についた」27.5%（25.9%）、「レポート作成に役立つ」22.8%（20.2%）、「ICTを使用して情報収集・分析・処理能力が身についた」20.1%（20.2%）、「情報倫理（情報モラル・情報マナー）が身についた」14.3%（12.6%）等の順になっている（設問24）。

情報リテラシーは、大学生の学修や生活にとって不可欠な知識やスキルであり、加えてSNSをはじめとする情報サービスの使用には高度なモラルが求められている。生成AIの活用が進められようとしている今、そのスキルの熟達はもちろんのこと、モラルに適する態度形成に向けても、いっそうの充実した教育の展開が望まれる。

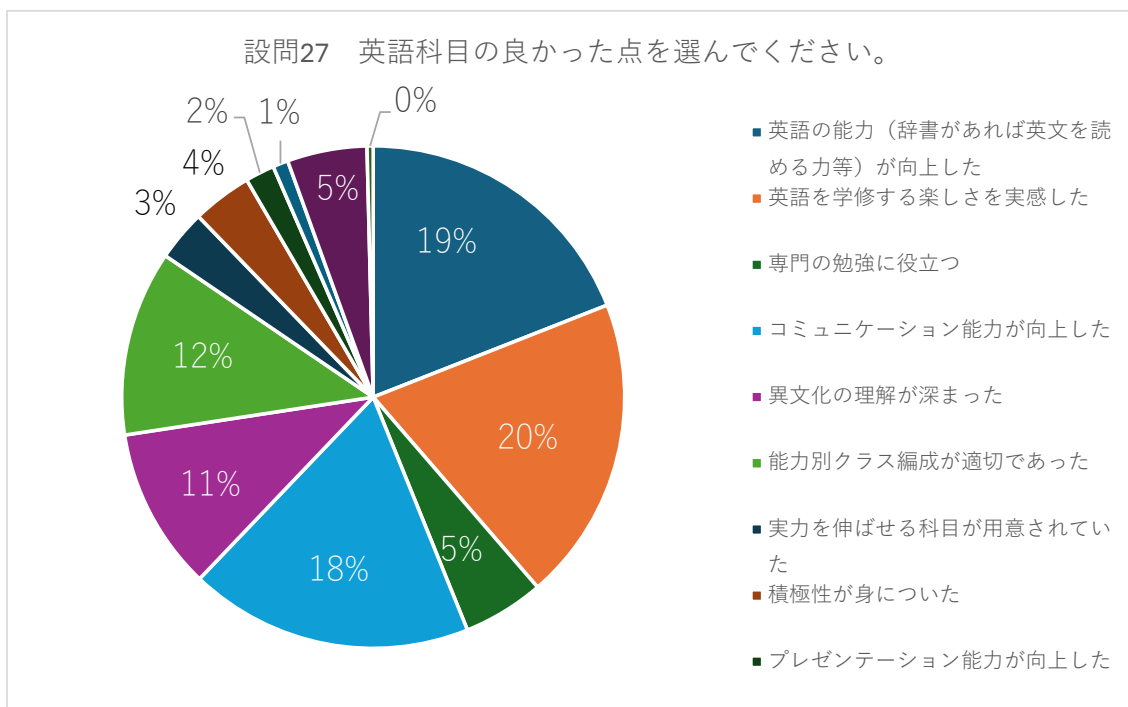


英語については、全学において、「とても満足した」32.8%（37.4%）、「ある程度満足した」48.3%（47.8%）を合わせると、81.1%（85.2%）が満足感を示している。昨年度に比べて、その割合は下降しているが、一昨年度に比べれば、まだ高い。

「今以上に高度な内容が必要」とした学生は10.5%（11.9%）に留まり、「今の程度の内容でよい」が75.1%（78.4%）と多数を占めている。「今よりも少ない内容でよい」とする者は、全体では12.3%（8.6%）を占めた。

次に、英語科目の良かった点については、「英語を学修する楽しさを実感した」が19.6%（18.1%）、「英語の能力（辞書があれば英文を読める力等）が向上した」が19.0%（20.5%）、「コミュニケーション能力が向上した」が18.2%（16.8%）、「異文化の理解が深まった」10.5%、「能力別クラス編成が適切であった」11.9%の順であった（設問27）。

英語科目の良かった点について、自由記述欄に記入された内容を見ると「英語の文章を作る力がついた」や「授業が面白い」等とあった。



「初修外国語」のどの語種を選択したかについての設問に関して、回答したのは延べ 452 人である。回答者総数は 543 人であるから 91 人はこの設問に答えていない。薬学部については、初修外国語の履修を義務づけておらず、希望する者のみが学ぶことになっている。このことが主たる原因であると見られる。また、複数の初修外国語を学んだ学生も少数ながら含まれていることもありうる。

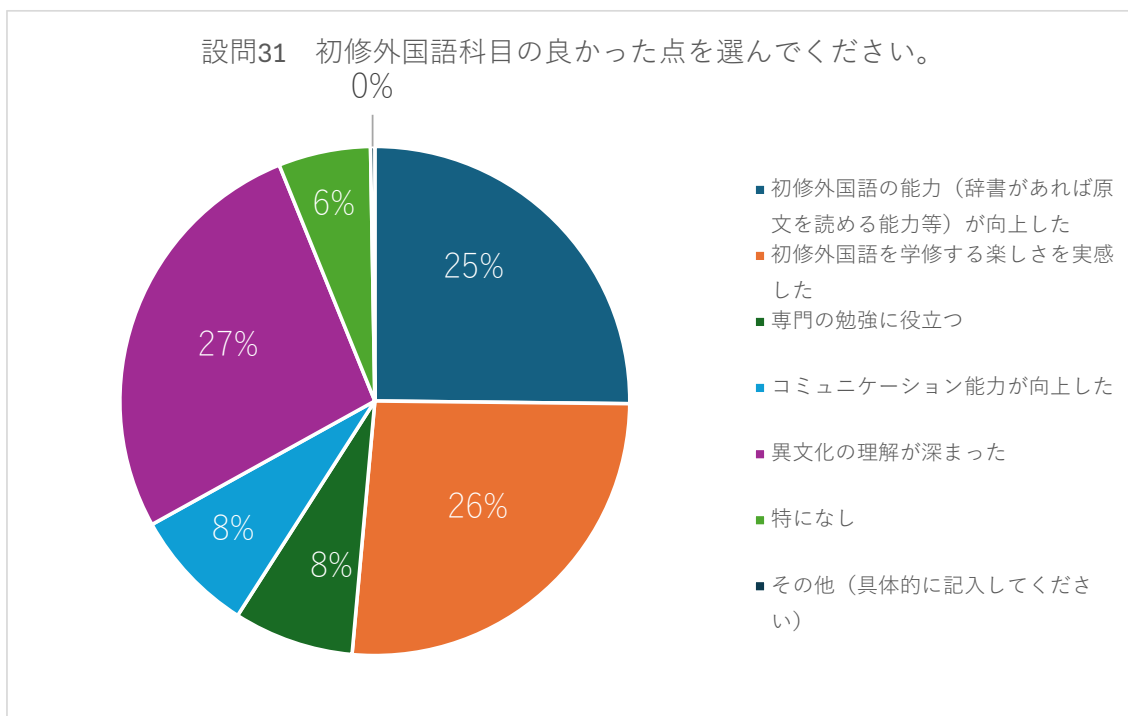
この結果、回答者を語種別に見ると、韓国語が 46.5% (32.7%)、中国語が 25.4% (37.6%)、ドイツ語が 17.3% (17.1%)、フランス語が 10.8% (12.5%) の順になる。

括弧内に示した昨年度の比率を見ても分かるように、初修外国語の履修は希望によることを基本としているため、年度による履修者の割合には変動が起こる。平成 30 年度に新設した韓国語の履修者が近年、上昇傾向にあり、今年度は中国語を抜いて第一位となったことが注目される。

これら初修外国語 4 言語の学修に関して、「とても満足した」は 32.4% (32.8%)、「ある程度満足した」は 48.0% (45.0%) と、あわせて 8 割強が高く評価しており、「あまり満足しなかった」4.4% (6.4%)、「まったく不満だった」2.2% (2.1%) を大きく上回っている。授業の難易度については、「今以上に高度な内容が必要」は 4.7% (3.0%)、「今よりも少ない内容でよい」は 21.2% (18.0%) であった。

多くの学生にとって初めて学ぶ初修外国語には、中高での英語学修の「しがらみ」を離れ、語学やその背景にある当該国の文化を学ぶ楽しさを伝えられるよう、教育内容や教授法に関して今後も、いっそうの工夫が望まれるところである。

「初修外国語の良かった点」については、「異文化の理解が深まった」が 26.9% (24.0%) でトップであり、「初修外国語を学習する楽しさを実感した」26.3% (26.2%)、「初修外国語の能力（辞書があれば原文を読める能力等）が向上した」25.2% (25.7%) がこれに次いでいる。「コミュニケーション能力が向上した」7.9% (9.1%)、「専門の勉強に役立つ」を選択した学生は 7.6% (6.9%) であった（設問 31）。



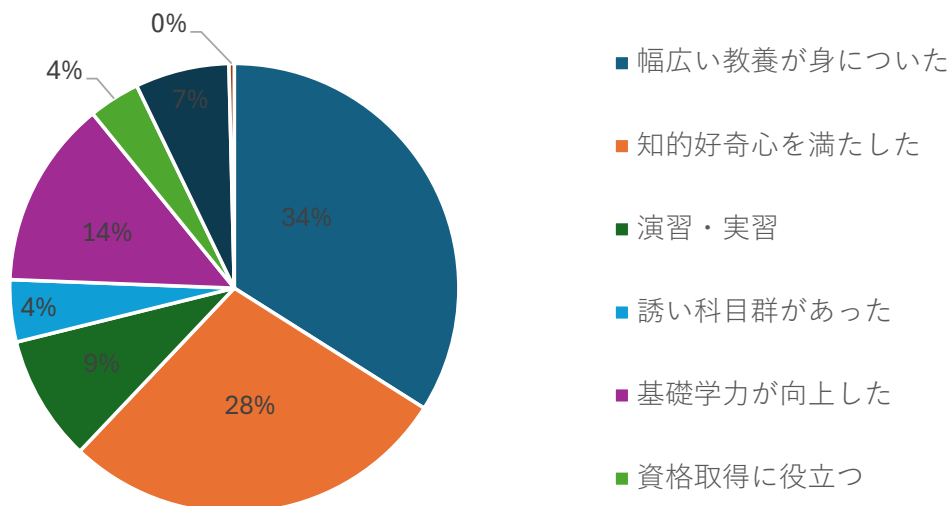
6. 教養教育科目について

教養教育科目（A～F 群）を全体として見た授業時間数と内容について、「今の程度の内容でよい」と回答した学生が 84.9%（89.9%）を占めた。「今以上に高度な内容が必要」と回答したのは 4.2%（5.7%）、逆に「今よりも少ない内容でよい」と回答したのは 8.8%（2.6%）であった。

教養教育科目履修の際に特に重視した点については、上位から「知的好奇心を満たす」36.6%（42.6%）、「単位数稼ぎと時間割の穴埋め」20.8%（17.9%）、「基礎学力の向上」20.6%（19.7%）、「専門教育に役立てる」16.9%（15.6%）の順である。「資格取得」は 4.4%であった。とりわけ「単位数稼ぎと時間割の穴埋め」という、消極的なねらいを選択した学生の割合が増加傾向にあると見られる。注視しておきたい。

教養教育科目を履修した結果、良かった点については、上位から「幅広い教養が身についた」34.0%（34.2%）、「知的好奇心を満たした」28.1%（28.4%）、「基礎学力が向上した」13.5%（14.5%）、「演習・実習」9.1%、「特になし」6.8%、「誘い科目群があった」4.5%、「資格取得に役立つ」3.7%の順であり（設問 34）、この設問に対する回答の傾向は、この 5 年間で、ほぼ同じである。

設問34 教養教育科目（A～F群）を履修した結果、良かった点を選んでください。



7. キャリア教育（1年次履修のキャリアデザイン1）について

「キャリアデザインⅠを受講して将来役立つ力が身に付いたと思いますか?」と、この科目に対する満足度を尋ねたところ、「とても思う」が24.3%（24.4%）、「まあまあ思う」44.9%（46.8%）と、4人中3人近くの者が将来役立つと回答した。逆に、「あまり思わない」4.4%（4.9%）、「まったく思わない」2.6%（4.4%）と回答した者も見られた。

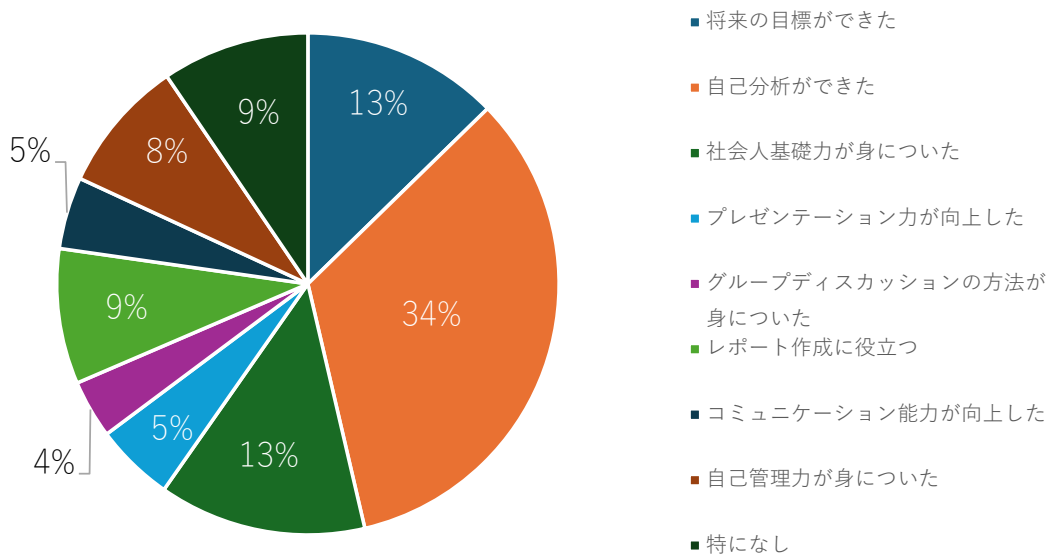
キャリアデザインⅠの難易度については、「今の程度の内容でよい」77.2%（78.4%）、「今以上に高度な内容が必要」5.0%（4.4%）という回答の一方で、「今よりも少ない内容でよい」11.6%（12.5%）や、「まったく必要性を感じない」6.3%（4.7%）と回答した学生もいる。引き続き、一年生からキャリア教育が必要になってきている社会的背景（例：就職活動の早期化・多様化など）の説明をしたり、自らキャリアをデザインすることの重要性について啓発活動をおこなったりしていくことが必要不可欠だと考える。

キャリアデザインⅠを履修して良かった点については、その上位3項目を挙げると「自己分析ができた」33.7%（33.6%）、「社会人基礎力が身についた」13.4%（11.7%）、「将来の目標ができた」12.7%（14.7%）であり、あと「レポート作成に役立つ」8.7%、「自己管理能力が身についた」8.6%と続く（設問37）。「将来の目標ができた」と「社会人基礎力が身についた」の順の入れ替わりが、昨年度の結果と異なる。

8. 学生の学修意欲について

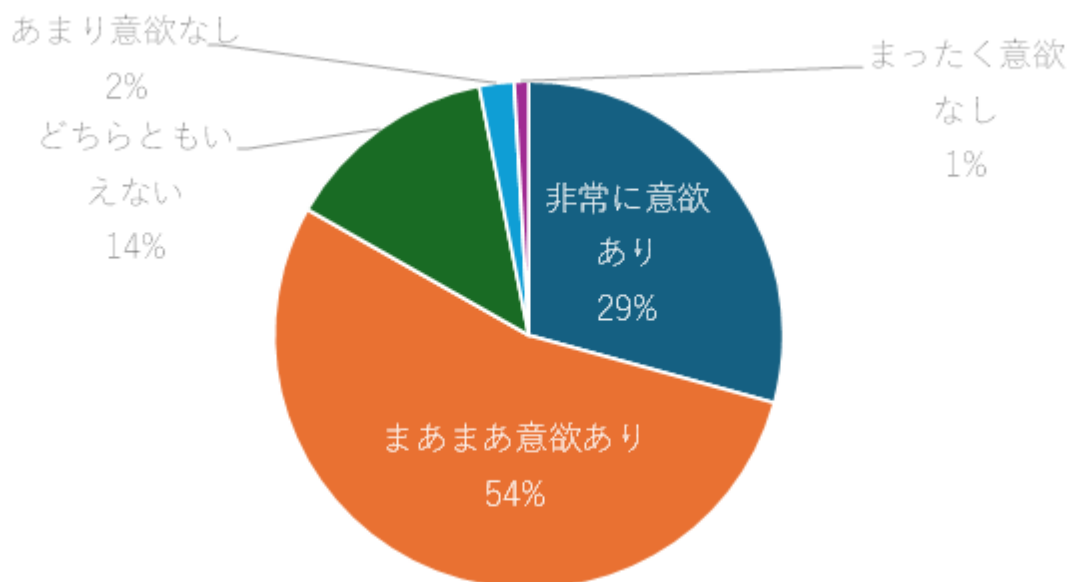
本年度1年次生における学修意欲についての質問項目では、入学時に「非常に意欲あり」29.3%（40.3%）、「まあまあ意欲あり」54.0%（48.8%）と自己分析している。この数値は前期終了時に、それぞれ21.0%（23.4%）、56.9%（58.2%）に変わり、さらに学年末に当たる今回の調査実施時には20.3%（23.1%）、58.6%（57.4%）となっている（設問38～40）。

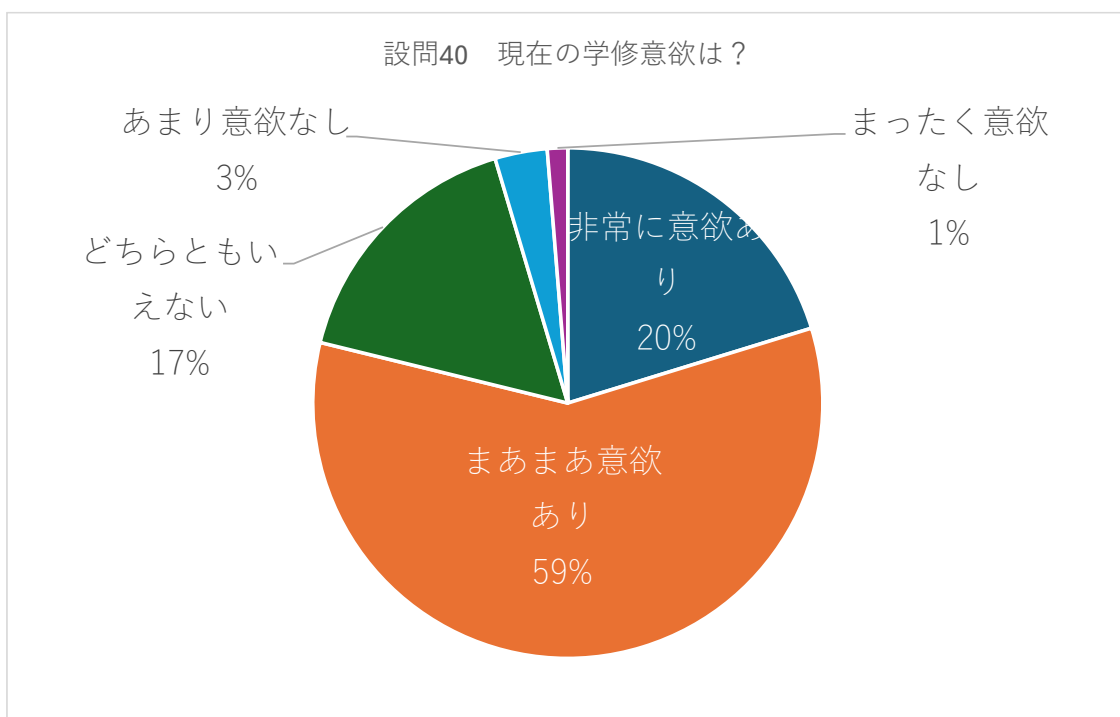
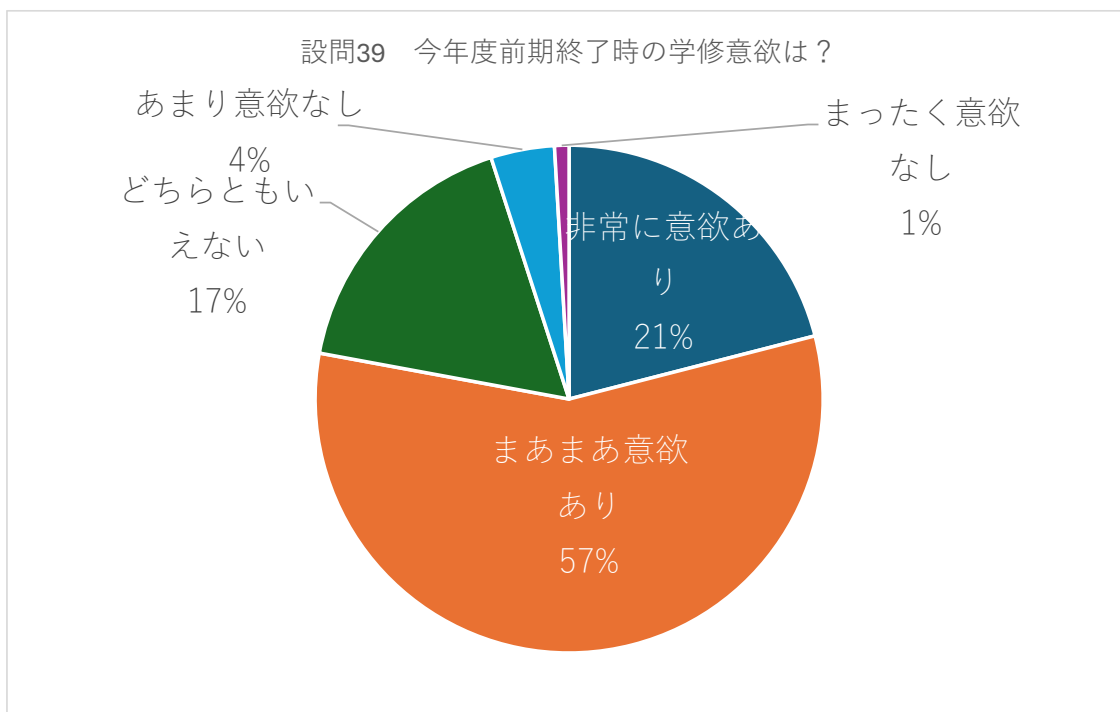
設問37 キャリアデザインⅠの良かった点を選んでください。



一方、「あまり意欲なし」「まったく意欲なし」と回答した学生の合計の割合は、入学当初 3.1% (2.8%)、前期終了時 5.0% (4.9%)、学年末 4.6% (4.5%) で（設問 38～40）、意欲のない状態で入学し、その後、昨年度と同様、少し悪化していることが見て取れる。留年や退学防止の観点から、学修意欲の乏しい学生層に対する取り組みは、いっそうの改善を図る必要がある。

設問38 入学時の学修意欲は？





9. アンケート調査結果を踏まえた今後の改善策

以上述べてきたアンケート調査の結果を踏まえ、また、本文ではあまり触れなかった自由記述意見にも触れながら、全学共通教育の現況と改善策について今少し述べることで、本報告の結びとしたい。

まず、昨年度に比べて回答率がかなり上昇した。学生への一斉メールでの回答要請の他にも、大学教育センター運営委員会の委員である各学科長を通じて、調査への協力を学生に呼

びかけて下さった結果であろう。今後も、回答期間は延長することなく、決められた期間内で終わるようにしていく。そのうえで、共通教育科目の各担当教員や、各学科の先生方の協力を得ながら、たとえば授業時間中に調査への回答依頼を学生へ直接伝えて頂くなど工夫し、粘り強く協力の要請を続けて、回答率の更なる上昇を果たしていきたい。

また、大学教育センターが行っている各種の学修支援についての認知度の低さを深刻に受け止め、改善策を講じているところであるが、その効果が現れつつあると見られる。eラーニング・システムについても同様である。いまだ、その存在自体がよく知られていないことの分かる記述が散見されるものの、引きつづき新入生オリエンテーションを初めとする各種の機会を捉えて、周知、広報に努めていきたい。

さらに、共通教育科目の充実度を問うたことで見えてきたのは依然として、とくに教養教育科目のA群からF群の中身やキャリア教育科目へのその評価が比較して低いということである。とりわけ、戦争の絶えない世界、異常気象、AIに代表される先端技術の進展、少子高齢化などを目の当たりして生きる今、人間文化・社会の価値を問い、それを創造することに接近するような科目、すなわち人文科学や社会科学に関する科目の充実を図ってきたい。

一方で、教員が励まされるような記述も見られた。例えば「毎日の授業がとても楽しいです。これからも頑張っていきたいです」「来年も頑張りたいです」等である。反対に、次のような記述からは、問題点を確認し、課題を具体的に設定し、一つ一つ改善していかなければならないと受け止められた。「履修の取り方が分かりづらい所があったりするので新入生の為にもシステムをもう少しわかりやすくしたほうが良いと感じた」「興味のある授業が専門教育科目の授業の時間と重なっていることが多く、ほとんど選べなかったことが少し残念でした」などである。とりわけ後者は、時間割を編成する際に考慮すべき点である。

最後に、学修意欲の点で言えば、入学時に「非常に意欲あり」や「まあまあ意欲あり」とした者は計83.3% (89.1%) で、この数値は前期終了時には計77.9% (81.6%) に変わり、さらに学年末に当たる本調査の実施時には78.9% (80.5%) という結果であった。昨年度と同じで、その数値だけで見ると、全体的には時の経過とともに、意欲の低下することが窺われる。とはいえ、その個々で見れば、きっと意欲の程度や推移は様々であろうし、全体的な傾向だけでは、評価し難い。教職員による日常の働きかけを通じて彼らの意欲の維持・向上を図っていききたいし、学生が支え合っていけるような環境づくりも心がけていきたい。